

3 シンボルマークデザインについて



シンボルマークと言うのは、ひとめ見て印象に残らなければならず、小さく掲載しても形が潰れてはならないといった制約を持ったものなので、必然的に形と色を単純化する必要がある。(造形の世界では、これを便化と呼ぶ)

単純化された形では当然ながら複雑で大量の情報を表すことはできない。しかし、単純であればどんな形でも良いのかと言うと、そうもゆかない。単純な形の中にも視覚的なイメージは十分に宿ってしまうからだ。大まかなざっくりとした印象として柔らかいのか硬いのか、豪快なのか繊細なのか、安定しているのか機動性に富んでいるのかなど、さまざまなイメージがある。大まかなイメージの方向性とでも言ったらよいだろうか。

これらは、大まかなものだから軽視してよいかと言うと、それはむしろ逆で、大まかだからこそ見る人に与える印象は決定的なものになってしまうのだ。

今回の社会連携研究センターのデザインオリエンでは、各大学や自治体や経済団体等を結びつける調整役として、親しみやすいイメージが欲しいとの要望をいただいた。

親しみやすいイメージを演出するには、直線よりも曲線ではないかと単純に発想してスケッチを進め、社会連携研究セン

ターの愛称である RCCS の頭文字「R」をモチーフとした上のマークに辿りついた。

周辺の曲線的で不定形な寒色系の形態は、大学、自治体、経済団体等の組織を表している。これには、びわ湖や自然のイメージを重ね合わせることも出来る。この寒色系の色彩と対比させて、中央には暖色系(オレンジ色)の形態を配置した。これは各組織が連携して生み出した成果や新しい価値を表している。自然に対する人智と言うこともできる。

ここで登場する形態は、いずれもいわゆる幾何形態とは異なる不定形で偶発的な形である。しかしそれゆえ、絶えずゆるやかに動き、発展してゆく様を予感させる。

そうして集った不定形な形態の間に目を凝らすと、忽然と「R」の文字が浮かび上がる。これは、上述した組織間の連携を企画してマネージメントするのが「R」だと言うことを訴えている。

本稿前半でシンボルマークには複雑な情報を盛り込めないと言いながら、言葉や策を弄して少々矛盾している点はひとまず勘弁していただき、まずは直感的にその柔らかくて、たおやかな形態や明快な色彩対比、更には寝癖のついたような愛嬌のある「R」を楽しんでいただいてもよいと思う。

滋賀大学 教育学部 美術教育 世ノ一善生